

揖斐川町学校教育の在り方審議会・揖斐地区集会（議事録概要）

1 日 時 令和7年11月18日（火） ＜開会＞19時00分 ＜閉会＞20時15分

2 場 所 揖斐公民館・研修室

3 出席者

審議会委員 椿井 昭二、久保田 智也

事務局 教育長 香田 静夫、事務局長 所 貴宏、学校教育課長 富山 哲成

地域住民 12人

4 次 第

（１）開会挨拶

- ・ 椿井委員より、開会の挨拶を行う。

（２）概況説明

- ・ 教育長より、「揖斐川町における学校教育の現状と課題」について説明を行う。

（３）意見聴取

住 民：私は毎年、中高生海外派遣研修や小学生県外派遣研修の発表会を楽しみにしている。子どもたちの素直な生の声を聞くことができ、よかったことが伝わるので、外部講師の講演を聞くよりもよいと感じている。今年度の発表会も楽しみにしている。

住 民：大野町が小学校と中学校をそれぞれ1つに統合するという方向で動き始めたと聞いている。多額の費用や様々な問題が関わるが、揖斐川町もこれだけ少子化が進んでいる中では、統合という方向に進まざるを得ないと思う。私は自身が移住者ということもあり、人口減少を少しでも抑えるためには、流出を抑える以上に移住者を増やす必要があると考えているので、そういう観点では学校を1つにまとめて大きな学校にし、スクールバス等で送迎するという先進的な動きをすることで、移住者へのPRにもなるのではないかな。

住 民：少し主題と外れるが、アメリカには「マジシャンのまち」と呼ばれるところがあり、世界中のマジシャンが集まっていて、大会なども行われている。まちづくりの政策として、揖斐川町も他に類を見ない「何々のまち」を目指す、という発想を持つことが人口減少を抑制することにつながると感じている。

住 民：人口の問題については、町内の空き家に移住してもらうための取組みを促進した方がよいのではないかな。若い方が移住してくれば、子どもも生まれて人口も増加すると思う。就労先が少ないために揖斐川町に住んでも近隣の市町村まで行かなければいけないという課題はあるかもしれないが、町内の企業への就職促進などといった方策を考えながら、移住を促進していくことがよいのではないかなと考えている。

住 民：今の時点では統合について明確な意見はないが、学校教育という意味では、そもそも子どもたちに義務教育の期間に身につけてほしいことは何か、という観点から考えていかなければいけないと思う。それには「学力」と、大人になって社会に出た時に一人だけで誰とも関わらずに生きていくことはできないので、そういった意味では「社会性」ということが挙げられる。そのことから考えると、あまりにも少人数になってしまうことには問題があるのではないかな。一方で、現状の子どもの人数だけで考える

ならば1校でよいということになるが、小学校や中学校は地域の防災拠点という側面もある。また、どの学校も150年ほどの歴史があり、地域住民にとっては愛着のある場所であるため、感情的になかなか納得できない人も多いのではないかと。さらに、今各学校で取り組んでいる地域についての学びに関して、この「地域」を今の小学校区域ではなく、もう少し広い地域を自分たちの地域として我々大人も受け入れないといけないということになる。現状、例えば揖斐地区に住んでいる我々は揖斐祭りを自分たちの祭りだと思っているが、他の地区も同じ地域の祭りだから一緒にやる、と言われると違和感があるのではないかと。だが、そうではなくて、これから子どもたち、もし統合するのであれば住んでいる地区の住民たちも含めて、「それは自分たちのまちのことだから一緒に学ぼう」という姿勢が必要になる。また、我々はどちらかというと子どもの数が少ない地域に住んでいるため、学校についても統合して児童生徒数を増やした方がよいという話が出てくるが、子どもの数が多いところからすると、小規模校は先生一人に対して子どもの数が少ないために手厚く指導していただけるという面もあるとのことだった。そういう話を聞くと、小規模校が必ずしも悪いわけではないのではないかとと思われるが、あまりに小規模では社会性の確立は難しいという問題もある。全体の予算という視点でも、学校数がたくさんあればそれだけ費用が必要になるということになるため、そのあたりの兼ね合いが非常に難しいと感じている。

住 民：今、揖斐地区では大和地区、北方地区、春日地区の子たちが子ども歌舞伎を習っているが、揖斐地区の子は1人もいない。そういったことから考えなければいけないのではないかと。また、我々は子どもの頃から軸に関わっていたため体に馴染んでいるが、そうした関わりがないと参加してもらえなくなるため、参加機会を増やすことが一番よいのではないかと考えている。そうしたイベントの回数を増やすことが一番効果的ではあるが、祭りを複数回開催することはできないので、小学校で教える学年を5年生から3年生に引き下げるなど、早い段階で習うようにしていただくとうい。

住 民：今の社会人はパソコンで仕事をしているが、チームワークで仕事をしてほしいと伝えても、朝あいさつしてから17時まで会話もなく、パソコンで作業するだけで終わってしまう職場がある。パソコン上で仕事ができればよいという部署もあるが、やはり会社はチームワークとコミュニケーションがなければいけないと考える。その観点で考えると、野球部やサッカー部などチームで何かを取り組んだ経験のある人はやはりチームワークを重要視しているので、小学校や中学校の教育の中でもチームで取り組むことに注力してもらえるとよい。なかなか社会人になってからチームワークについて教育しようとしても、長年の習性は修正できない。だが、1人の優秀な人より10人の仲間の方が力を強く発揮できるため、社会人になった時のことを考えると、チームワークを重視した教育をされることがよいと考える。

委 員：チームワークを教えるにも、ある程度の人数が必要である。

住 民：我々の時代にはパソコンやタブレットというものはなく、就労している間に使う機会がなかった場合、今でもパソコンを使えないという人もいる。子どもの頃からタブレットを使っているということはよいことだと思う。

教育長：ICTの活用についても話をしたが、使えるようになること自体が目的ではなく、あくまでも道具として使用している。パソコンを使って人間関係が広がったり、コミュニケーションをとったりすることもできるという面もあり、実際に社会では欠かせないものになっている。

- 委員：欠かせないものではある。先ほどの意見と同じく、私たちの会社でも「チームは大事に」という方針がある。チームワークを大切にする教育はなくさないでほしい。
- 住民：学校を統合して大きな学校であることを目玉にするのもよい、と言ったが、小さいが故のメリットもあるので、それを前面に打ち出して他市町村にはないスタイルとして発信してもよいと考える。あえて小規模のまま統合せず、手厚い教員の配置によって学力を向上させる。さらに、社会性の向上については時々町の児童生徒が全員集まってチームならではの取組みを行う、というような特殊なことを考えてもよい。
- 住民：今の意見に関して、山県市は議論を重ねた結果、「山県方式」という統合しない形式をとっている。なぜそのようになったかという、議論の過程の中で、小規模校と小規模校を統合しても1クラスにしかならず、先生の人数も統合することによって減るといった問題が出されたため、どう解消するかを検討した結果統合しないことを選択した。この方式では、例えば体育など特定の授業はバスで集まって実施したり、そうした移動時には朝の会をバスの中で行ったりしているが、今全国の自治体が視察に訪れている。関連して、この地域集会やシンポジウムについて感じたことがある。まず、シンポジウムで取り上げられる事例はいずれも大きな学校のことばかりであり、それとは異なる山県方式のような論も入れて、皆様に様々な情報を伝えたいうえでどうすることがよいのか選択していただかなければいけないと思っている。次に、今日の地区集会に来ているのは何らかの形で教育や地域のことに関わっている方ばかりで、いわゆる一般の方がいらっしゃっていない。恐らくお母さん方は子育てが大変で来られないのだと思うが、それこそ1学年で48人しかいない令和6年度に生まれた子どものお母さん方など、将来関わることになる方たちにどれだけ来てもらえるのかということも大事なことである。まだそれだけ関心がないということだと思うので、「自分の子どもが学校に通うときの教育はどうなっているのだろう」ということを真剣に考えてもらえるような発信をしていかなければいけないのではないかと感じた。2年である程度筋道を立てると聞いているが、その中でもっと様々な方に関わっていただけるような仕組みづくりもしてほしい。
- 住民：それぞれの児童生徒のお母さんへの連絡はメールで行われていると思うが、そういったものを活用した意見聴取を行うことも一つの方法だと考える。
- 住民：主題とは関係のない話だが、新しくなった岐阜市役所やその北側にあるメディアコスモスには、図書館やカフェがあることもあって、高校生も含めた若い人が多くいる。何らかの魅力があるようで、それぞれにとっての安らぎの場になっている。駐車場はあるものの、あまり交通の便がよいところではないはずだが、それだけ活気があるということで、画期的な場所だと感じている。
- 住民：移住者を増やすことを考えた場合、特に子どもが小学生くらいのファミリー層に対しては、「小学校まで徒歩数分」という地域と「小学校まで5km」という地域だと、たとえばバスが来ることによって本質的な違いがないとしても、やはり「徒歩数分」という方が訴求力は強い。町外の人にはまずその情報が目に入ってしまうので、それ以上の魅力があって、小学校までの距離についても調べてもらえて、バスが来ることまで知ってもらえるようなまちになるとよいと思う。
- 住民：その点では、揖斐川町は子育て支援が手厚い。この「学校教育の在り方」という論点についても少子化が大元にあると思うので、子どもが減っていく中でどうするかということと併せて、町の強みをもっとPRするなど、減らないようにどうしたらよいか

ということの両面から考えられるとよい。

教育長：「社会性を育むには大きな規模の人間関係の中で生活した方がよい」という意見や、「きめ細かな指導や支援ができることが小規模の特性である」という意見が出されたが、こうした内容は審議会の中でも話題となった。このことについて、委員から何かご意見はあるか。

委員：個人的にはクラスの人数が多くなるのがよいと思っている。自分の経験として、私が子どもの頃には同じ学年に40人ほどの子どもがいて、中学校も7クラスあり、知らない人もいるくらいであった。少し失礼かもしれないが、先生から学ぶこと以上に人との関係から学ぶことが多かったと感じるため、やはり関わる人は多い方がよいのではないか。また、先生方も恐らく何十人という子どもたちをみることができるよう教育を受けて先生になっていらっしゃるはずなので、クラスの人数によって影響が出ることはないのではないかと考えている。

委員：資料の図表2をみると、令和6年度の出生数は多くの地区で10人を下回っている。複式学級という選択肢を踏まえても、やはり1学年2人や5人というのは極端に少なすぎるのではないか。

住民：恐らく、二世帯で住むことができない家屋が多い。そのために若い方のほとんどが町外へ出てしまい、結果として子どもも少なくなる。そういう現象がずっと起きているのではないか。

教育長：先ほど山県市の事例が挙げたが、そちらについても理解できるような形を設定したいと改めて考えている。また、シンポジウムで挙げる事例については、揖斐川町も同様の方針にするという意図ではなく、まずは知りたいという声があったところを事例として紹介させていただくという形である。また改めて山県市の取組みなども紹介できる機会をつくりたい。

住民：複式学級というものの感覚がつかめていないが、複式学級の場合、先生方にとってその運営は難しいのか。

教育長：一つの教室の中に複数の学年の子どもたちが一緒にいることになるが、例えば教科の学習内容を定着させようと考えた時に、学年が変わると学習内容が違うため、先生はそれぞれに教えることになるので、一方の学年の子どもたちに教えている間はもう一方の子どもたちは自分で学ぶ時間になる。これを「わたり」と呼ぶが、こうしたことができる指導力が必要という点では先生たちにとって難しいものであり、それで子どもたちに学力がつくかと言われると、一概には言えないが、なかなかそうでない部分もある。先生たちにとって難しい部分は間違いなくある。

住民：通常の同学年のみで構成された20～30人程度のクラスと、複数の学年がいるクラスでこちらの学年には算数を、こちらの学年には国語を教えるということになると考えると、やはり難易度が高そうだということは感覚的にわかる。

委員：複式学級の先生は1人なのか。1人で、同じ時間に異なる学年に違う教科を教えることもあるのか。

教育長：先生は1人だが、教科は合わせる。ただし、教える内容が違うということである。児童生徒数とクラス数という点で言うと、今は学年に35人であれば1学級で編制するが、36人であれば1学級18人ずつの2クラスとして編制することになり、よいかどうかは別として35人の学級よりもきめ細かくみることができるようになる。また、2クラスある場合は必要に応じて一緒に活動をすることで人間関係を膨らませるような活動

ができるため、少なくとも児童生徒の数だけではなく学級数も考えながら、学校の規模や統合の有無も含めた検討が必要だと考える。ただし、現状のままであれば、出生数がかかり厳しい状況にある以上、今後1学年で2クラス以上編制することは考えにくいのではないかとと思われる。

住 民：1学年の人数が何人以下になると複式学級になるのか。

教育長：1年生の有無によっても変わるが、今は2学年合わせても15人以下になると複式学級を編制している。

住 民：教育の密度という話で考えると、確かに先生が2学年を同時に教えるというスキルは必要だが、例えば複式学級で2学年の子どもの合計が10人のクラスの場合、1人あたりに先生が接することができる密度は逆に高くなるのではないか。やり方次第では、複式学級で教える時間が薄くなるのではなく、むしろ濃いこともできるのではないかと考える。

住 民：授業について考えると、授業全体の時間も全員で考える時間も半分になるということである。

住 民：確かに授業自体の時間は半分になるが、仮に1学級に30人いる場合には、個々の生徒に気を配る時間が1時間とすると、1人あたりの時間は30分の1時間になる。個々のスキルを先生が把握するという意味では、密度が高くなると言えるのではないか。

住 民：2学級以上あれば同じ学年同士で競い合うこともできるが、今はそれができない状態である。

住 民：社会性という意味では、クラス替えがないことはよくも悪くも影響があると感じる。

委 員：小規模校と大規模校で、いじめの問題に何らかの違いはあるか。

住 民：クラスの人数が少なければいじめが少ないかというところではなく、逆に少なければ多いとも言えない。

住 民：先日、今の子どもたちは幼稚園から中学校までずっと同じメンバーで成長するので、自分の中で体育や学力に関する立ち位置を決めてしまい、向上心がなくなってしまうという話をある保護者の方から聞いた。そういうこともあるため、クラス替えがあるに越したことはない、というように言われていた。

住 民：幼稚園から一緒だと、自然にそうになっている可能性はある。一方で、物心ついた頃から一緒にいるために、性別の境なく非常に仲がよいという面もある。私は名古屋出身だが、小学校も中学校も揖斐川町より大規模でクラス替えもあったため、友達がたくさん増えたとし、クラス替えの際に新しく交流をしなければいけないという意味ではよいことだったと思っている。一方で、3年生くらいから男女を意識し始めて、異性同士で遊びづらい雰囲気もあったので、そういった現象が起きていないクラス替えのない今の環境もある意味ではよいと思っている。いずれもよい面と悪い面があるため、山県市がどのような方式でやっているのかが知りたいし、普段は少ない学級で過ごして、時々集まって大規模な活動を行うという方式ができるとよいのではないか。

委 員：山県市の場合美山地区の奥にも住まれている方がいると思うが、そういう地域には小学校はもうないのではないか。

教育長：すでに美山地区、伊自良地区、高富地区それぞれでの統合は一定程度実施しているが、今も1学年に数人という極小規模の学校はある。そういうところを統合しないまま組み合わせ合わせて教育を行う、というやり方を行っているようである。

住 民：今までの統合時に、その時統合された地区の方からどのような意見があったかという

ことや、統合して自分たちの地域にあった学校ではないところに通うことになった方々が今どのような思いでいらっしゃるか、ということは聴く必要がある。

住 民：例えば久瀬地区の子どもたちは、登下校時には集まって全員でバスに乗って学校に向かい、そして全員で帰ってくる。団体行動になっていることはよいが、やはり時間が多くかかる。

住 民：揖斐小学校区でも、来年から分団が1人になってしまい、分団登校ができなくなるのでどうすればよいか、という保護者の方がいる。いったん地域の方と相談するように伝えたが、学校まで距離がある地区なので、登下校どちらも心配である。

住 民：私が住んでいる地区にも今は小学生が1人もいないため、もし子どもが生まれてもどのように通学すればよいのか、という問題がある。

住 民：それについては学校規模の問題ではなく、いずれは必ずどこかで発生する問題である。地域に子どもが増える以外の解決策はないため、今はその少ない人数を安全に登下校させる方法を地域や家族で考えていくしかない。

住 民：この学校の在り方を考えるうえで、何年先のことを考えればよいのか。先日県内各市町村の将来の人口の推移に関する資料を見たが、揖斐川町は25年後には人口が半減、50年後には3分の1ほどになると書かれていた。仮に統合するとしても、新しく学校を建てるならばどのような建物にするのか、それとも既存のものを使うのかによっても必要な金額は変わる。また、この先大きく人口が減少するならば、その時々によってさらに状況が変化することになるため、今の時点でどの程度先まで考えればよいのか疑問に思っている。

教育長：どの程度先のことを考えて学校環境を整えていくかについても、審議会に諮っていく。

住 民：1つの方針だけで検討するのではなく、統合する地域もあれば単独で複式学級がある地域もあるというケースもあってもよいと思うので、様々なパターンで検討されるとよい。

住 民：どの程度先のことを検討するかについては、企業経営と同様に短期・中期・長期と分けて考えてもよいのではないか。

住 民：仮に統合する場合は、子どもたちの登下校について、広い地域をバスがどのように回って送迎するのか、どの地域をバス通学にするとスムーズなのかなどといった観点からも先行きを考えておく必要がある。

(4) 閉会挨拶

- ・ 久保田委員より、閉会の挨拶を行う。

以上、閉会